

間投詞的な文と非間投詞的な文

従属という概念をめぐる

Les phrases interjectionnelles et les phrases non-interjectionnelles

De la notion de subordination

川島 浩一郎

KAWASHIMA KOICHIRO

福岡大学

Université de Fukuoka

E-mail: k-kawa@cis.fukuoka-u.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.45 2019, p.51-70.

原稿受理 2019-11-26 ; 最終版 2020-02-22

抄録

文は、従属節化という観点から、次の四つのカテゴリーに分類することができる : (1) *Mais il est là* のような、従属節化されにくいという意味で間投詞的な動詞文 ; (2) *Mais non* のような、従属節化されにくいという意味で間投詞的な非動詞文 ; (3) *Il est là* のような、従属節化が可能という点で非間投詞的な動詞文 ; (4) *Non* のような、従属節化が可能という点で非間投詞的な非動詞文。

Résumé

Les phrases sont classées en quatre catégories acceptant ou non la subordination : (1) la phrase verbale interjectionnelle, comme *Mais il est là*, qui ne peut être une proposition subordonnée ; (2) la phrase non-verbale interjectionnelle, comme *Mais non*, qui ne peut non plus être une subordonnée ; (3) la phrase verbale non-interjectionnelle, comme *Il est là*, qui peut être une subordonnée ; (4) la phrase non-verbale non-interjectionnelle, comme *Non*, qui elle aussi accepte la subordination.

キーワード

文、非動詞文、従属、間投詞

© ふらんぼー Flambeau 45 (2019) pp.51-70.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



0. はじめに

言語は、二重分節の仕組みを備えている。たとえば (1) の発話は、第一次分節の仕組みによって、*bon* と *boulot* を実現形とする二つの記号素に分割される形で表現されている¹。また (1) の *boulot* を実現形とする記号素は、第二次分節の仕組みによって、四つの弁別単位 (すなわち /b/、/u/、/l/、/o/) に分割される形で表現されている。

- (1) *Bon boulot.* (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.449)
- (2) *Merci.* (Patrice Leconte, *Riva Bella*, Albin Michel, 2011, p.11)
- (3) *Merci de la confiance.* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.92)

二重分節の仕組みの存在は、言語にとって、大きな特質であると言ってよい。実際もし第一次分節がなければ、言語記号は本質的に「赤信号」や「青信号」のような交通信号と、同質のものになってしまう。二重分節の仕組みを備えていることは、他の種類の記号からの弁別という点において、言語記号の最大の特徴であると考えられる。

間投詞記号素は、その使用が、第一次分節を前提とするとはかぎらない表意単位である²。間投詞記号素は、(2) の *merci* のように、その実現形が単独で現れる可能性を内在的に備えている。実際、単独で現れた (2) の *merci* は、第一次分節の結果ではない。メッセージが、複数の記号素の実現形に分割される形で表現されてはいないからである。ただし (3) の *merci* にみられるように、間投詞記号素の実現形は、第一次分節の結果として、つまり統辞的な分析の結果として現れてもよい。(3) の発話は (*merci* を含む) 複数の記号素の実現形に分割される形で表現されている。間投詞記号素は、二重分節の仕組みに制約されない表意単位であると言ってよい。

つまり間投詞記号素は、やや周辺的な言語記号である。間投詞記号素は、第一次分節を前提にするとはかぎらないからである。たとえば (2) の *merci* が記号として果たす効果は、「謝意を示すための身振り」による効果と大きくは変わらないように思われる。

本稿では、文を間投詞的なものと非間投詞的なものに分類することを試みる。文には、動詞文と非動詞文がある。動詞文は、文としての独立性の基盤を、動詞記号素の実現形が担う文である。非動詞文は、文としての独立性の基盤を担うのが、動詞記号素の実現形ではない文である。つまり文を、間投詞的な動詞文、間投詞的な非動詞文、非間投詞的な動詞文、非間投詞的な非動詞文という四つのタイプに分類できることになる。

この分類によって、統辞現象において「間投詞的な性質」に関与性があることを具体的に示すことを試みる。言語における間投詞記号素の存在には、確かに、周辺的な側面がみ

¹ 本稿で使用する重要な用語や概念には、できるだけ説明を加える。人文科学の用語や概念が、いつも同じ意味で理解されているとはかぎらないからである。たとえば第一次分節については、それを「複数の記号素 (形態素) を組み合わせてメッセージをつくること」とする解釈がある。しかし本稿では、第一次分節を「メッセージを複数の記号素 (形態素) に分割して表現すること」として定義する。

² MARTINET (1979). *La grammaire fonctionnelle du français* : 147

られる。しかし「間投詞記号素の存在」と「間投詞的な性質」は、決して同じものではない。表意単位の実現形における「間投詞的な性質」の有無は、統辞現象に明確な影響を与えると行ってよい。「間投詞的な性質」の有無は、間投詞記号素を、それ以外の記号素から弁別できるだけの基準ではない。この性質の有無は、記号素の分類基準としてだけでなく、文の分類基準として活用することも可能である。

1. 従属関係

1.1. 中心性と付随性

複数の表意単位の実現形が、発話において、同等のステイタスを担うとはかぎらない。表意単位には、記号素や連辞（複数の記号素の複合体）がある。たとえば (3) の *bleu ciel*、(4) の *bleu pâle*、(5) の *bleu nuit* はそれぞれ、ある色調を帯びた青色を意味する。つまり、これらにおいて中心的なステイタスを担うのは、*bleu* という表意単位の実現形である。一方 (4) の *ciel*、(5) の *pâle*、(6) の *nuit* という表意単位の実現形が担うステイタスは、いずれも、*bleu* に対して付随的であると言ってよい。

(4) Il s'agissait d'un faire-part *bleu ciel*. (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.266)

(5) Une enveloppe *bleu pâle* tomba sur le parquet. (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.183)

(6) [...], une lourde porte *bleu nuit* s'ouvrit doucement. (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.81)

(7) [...] : le sabord dessinait un rectangle *bleu-gris pâle* sur une paroi de la cabine. (Jean Echenoz, *Je m'en vais*, Minuit, 1999/2001, p.45)

このような中心性と付随性の存在つまり階層性の存在は、第一次分節にとって必要不可欠である。第一次分節に階層性がなければ、言語表現のほとんどが、表意単位の実現形の単純な羅列でしかありえなくなってしまう。たとえば (7) の *un rectangle bleu-gris pâle* にみられる表意単位の意味関係は、いわば「単一性 + 長方形 + 青色 + 灰色 + 薄さ」のような概念の平板な並置から、想像や連想によって組み立てるしかないことになる。このタイプの伝達手段に限界があることは明らかである。

1.2. 出現の依存性

ある表意単位の実現形が文の中に現れるとき、その出現が、他の表意単位の実現形の存在に依存していることがある。たとえば (8) の *une fausse bonne idée* において、*une*、*fausse* および *bonne* の出現は、*idée* の存在に依存すると言ってよい。(8) における *une*、*fausse* および *bonne* の出現は、*idée* のような表意単位の実現形の存在を前提としているか

らである。実際 (8) から *idée* を除去すれば、それにともなって、*une*、*fausse* そして *bonne* もまた (8) から姿を消すことになる。

(8) *Ce que tu as fait, c'est une fausse bonne idée.* (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.292)

(9) *Elle passe son chemin.* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.46)

ある表意単位の実現形の出現が、他の表意単位の実現形の存在に依存するとき、前者は後者に従属すると言われる。このタイプの関係は、依存あるいは限定と呼んでもよい。この関係では、前者が中心的であるのに対して、後者は付随的である (1.1.を参照)。たとえば (9) の *son chemin* において、*son* は *chemin* に従属ないしは依存する。あるいは、*son* が *chemin* を限定すると言ってもかまわない。いずれの用語を使うにせよ、(9) の *son chemin* において、*chemin* が中心的で *son* が付随的であることに変わりはない。実際 (9) から *chemin* を除去すれば、*elle passe* と *son* の関係に本質的な影響が生じ、その結果 *son* はその存在意義を失うことになる。一方 (9) から *son* を除去しても、*chemin* が (*elle*) *passe* の直接目的辞であるという関係に、本質的な影響は生じない (1.4.を参照)。

1.3. 非等位的な性質

ある表意単位の実現形と「発話の残りの部分」の間関係が、他の表意単位の実現形と「発話の残りの部分」の間関係と、同等とみなされる場合がある。たとえば (10) において、*philosophie* と発話の残りの部分 (... *et spiritualité s'organisent contre l'horreur*) の間関係は、*spiritualité* と発話の残りの部分 (*philosophie et ... s'organisent contre l'horreur*) の間関係と、同等であるとみなしてよい。(10) の *philosophie* が主辞 (の一部分) であるのと同様に、(10) の *spiritualité* もまた主辞 (の一部分) だからである。

(10) *Philosophie et spiritualité s'organisent contre l'horreur.* (*Elle*, 19 septembre 2005, p.60)

(11) *Le Dr Morales dégageait élégance et sobriété.* (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.207)

(12) *Ensuite, elles, ils jouent la scène avec l'acteur.* (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.70)

ある表意単位の実現形と「発話の残りの部分」の間関係が、他の表意単位の実現形と「発話の残りの部分」の間関係と同等とみなされるとき、これらの表意単位の実現形は、等位関係にあると言われる。たとえば (11) の *élégance* と *sobriété* は、等位関係にあると言えることができる。これらの表意単位の実現形はいずれも、(11) において、直接目的辞 (の一部分) だからである。同様に (12) において *elles* と *ils* は、等位関係にある。これらは、発

話の残りの部分に対して同等の関係をもつからである³。

(13) *Blonde, élégante, jolie, elle était même davantage.* (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Terminus*, Collection Folio, 1980, p.150)

(14) *Ils parlaient polonais, russe, espagnol...* (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.379)

等位は、階層性の不在という点で、従属とは異なる関係である。従属という用語は、複数の表意単位の実現形の間に階層性があること、つまり発話において担うステイタス（発話の他の部分との関係性）に非同等性があることを表現する用語である（1.1.と 1.2.を参照）。他方、等位という用語は、複数の表意単位の実現形が担うステイタスに同等性があることを表現する用語である。(13) において「*blonde* と *elle était ...*の関係」、「*élégante* と *elle était ...*の関係」そして「*jolie* と *elle était ...*の関係」には、同等性がみられる（いずれも *elle* に対する同格）。つまり (13) において、*blonde*、*élégante* そして *jolie* は等位関係にある。(14) において、*polonais*、*russe*、*espagnol* は等位関係にある。いずれも、*il parlaient* の直接目的辞だからである。なお等位であるかそうでないかは関係性の問題であって、等位接続詞記号素の実現形（*et* や *mais* など）の有無は副次的な問題である。

1.4. 関係性への影響の有無

ある表意単位の実現形の存在が、他の表意単位の実現形が担うステイタスに、本質的な影響を与えることがある。たとえば (15) の *chez toi* では、*chez* の存在が、*toi* が担うステイタスに本質的な影響を与えている。実際 (15) から *chez* を除去すれば、*j'allais* と *toi* の関係に、本質的な影響が生じる。同様に (16) の *qu'il le sache* においては、*qu'*の存在が、*il le sache* が担うステイタスに本質的な影響を与えている。この *qu'*を除去すれば、*il le sache* と *n'était pas très alarmant* の関係に、本質的な影響が生じる。

(15) *J'allais chez toi.* (Sébastien Japrisot, *Piège pour Cendrillon*, Collection Folio, 1965, p.80)

(16) *Qu'il le sache n'était pas très alarmant.* (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.348)

他の表意単位の実現形が担うステイタスに本質的な影響を与えるような関係は、通常、従属とは異なる関係である。従属は、複数の表意単位の実現形の間に階層性があることを表現する用語である（1.1.を参照）。階層性に関与しない関係は、従属関係ではない（1.3.を参照）。たとえば (15) における *toi* の出現には、確かに、*chez* の存在を前提とする側面がある（1.2.を参照）。しかし (15) における *chez* の出現にもまた、*toi* の存在を前提とする

³ 敦賀陽一郎 (1998)「等位接続と統辞機能」: 204-215

側面がある。(15) から *toi* を除去すれば、*j'allais* と *chez* の関係に本質的な影響が生じることになる。つまり (15) において、*chez* と *toi* の間に明確な階層性はみられない。よって (15) における *chez* と *toi* の間にある関係は、従属と呼ばれる関係ではない。

2. 文の定義と独立性

2.1. 独立性（非従属性）概念による文の定義

ある表意単位の実現形が文と呼ぶことのできる実現形であれば、その実現形の全体は、他の表意単位の実現形に従属しない実現形である。たとえば (17) の *j'adore Dior* は、これが文であるかぎり、実現形の全体が他の表意単位の実現形に従属してはいないはずである。表意単位の実現形の一部を、文とは呼ばないからである。実際 (17) の *j'adore Dior* は全体として、発話の他の部分に従属していない (1.1.を参照)。より局所的には、これらに含まれる動詞記号素の実現形が、他の表意単位の実現形に従属していないからである (4.1.を参照)。つまり他の表意単位の実現形に従属しないことは、ある表意単位の実現形が文であるための必要条件であると言ってよい。(18) の *plus c'est beau* あるいは *plus c'est compliqué* は、文であるための必要条件をみたしていない。端的に表現すれば、これらの実現形の出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提にしているからである (1.2.を参照)。つまり *plus c'est beau* あるいは *plus c'est compliqué* を、単独で用いることは難しい。(18) において文としての必要条件をみたす実現形は、*plus c'est beau*, *plus c'est compliqué* という実現形全体しかない。なお *plus* のない *c'est beau* や *c'est compliqué* という実現形であれば、それぞれ、文としての必要条件をみたしていると考えてよい。

(17) *J'adore Dior.* (Frédéric Beigbeder, *Au secours pardon*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.293)

(18) *Plus c'est beau, plus c'est compliqué.* (Fred Vargas, *Dans les bois éternels*, Collection J'ai lu, 2006, p.67)

ある表意単位の実現形全体が、他の表意単位の実現形に従属しない実現形であるとき、その実現形全体は文と呼ぶことのできる実現形である。たとえば (17) の *j'adore Dior* は、他の表意単位の実現形に従属していない。よって *j'adore Dior* 全体を、文として認定することができる。この *j'adore Dior* を文として認定しないのであれば、文という概念そのものが無意味になってしまう。つまり他の表意単位の実現形に従属しないことは、ある表意単位の実現形が文であるための十分条件であると言ってよい。

よって文という単位は、他の表意単位の実現形に従属しない表意単位の実現形全体として定義することができる。他の表意単位の実現形に従属しないことは、ある表意単位の実現形が文であるための必要十分条件だからである。よって (17) の *j'adore Dior* や (18) の *plus c'est beau*, *plus c'est compliqué* は、いずれも、文であると言ってよい。これらが、他の表意単位の実現形に従属していないからである。

A un point de vue purement linguistique, et abstraction faite de toute considération de logique ou de psychologie, la phrase peut être définie : un ensemble d'articulations liées entre elles par certains rapports grammaticaux et qui, ne dépendant grammaticalement d'aucun autre ensemble, se suffisent à elles-mêmes.⁴

It is evident that the sentences in any utterance are marked off by the mere fact that each sentence is an independent linguistic form, not included by virtue of any grammatical construction in any larger linguistic form.⁵

以上の考察から、文という単位を、他の表意単位の実現形から独立した表意単位の実現形全体として定義することができる。非従属（他の表意単位の実現形に従属しない）という概念は、独立という用語によっても表現できるからである。なお、この文の定義は、上に引用した MEILLET (1903) や BLOOMFIELD (1933) による文の定義と、本質的には同一の定義だと考えてよい。MEILLET (1903) や BLOOMFIELD (1933) における文の定義も、本質的に、独立性ないしは非従属性という概念に基づいているからである。

2.2. 文と従属節

発話の他の部分に従属する必要のない表意単位の実現形全体は、文として認定することができる。文という単位は、他の表意単位の実現形から独立した表意単位の実現形全体として定義することができるからである（2.1.を参照）。たとえば (19) の *j'ai faim* や (20) の *je t'aime* の使用は、他の表意単位の実現形の存在を前提としない。つまり、他の表意単位の実現形に従属する必要がない（1.2.を参照）。よって、これらの *j'ai faim* や *je t'aime* は、他の表意単位の実現形から独立した表意単位の実現形である。したがって (19) の *j'ai faim* や (20) の *je t'aime* は、文であると言うことができる。

(19) *J'ai faim.* (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection *J'ai lu*, 1997, p.184)

(20) *Je t'aime, [...].* (Agnès Abécassis, *Chouette, une ride !*, Collection *Le Livre de Poche*, 2009, p.117)

(21) *Je crois que j'ai faim, [...].* (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection *Pocket*, 2006, p.151)

(22) *Je crois que je t'aime, [...].* (Frédéric Beigbeder, *99 francs (14,99 euros)*, Collection *Folio*, 2000, p.197)

(23) [...], mais je n'arrive pas à lui dire "*Je t'aime*". (*Elle*, 13 juin 2005, p.110)

文と同じ実現形を備えながら、他の発話の一部となっている表意単位の実現形があ

⁴ MEILLET (1903). *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes* : 326

⁵ BLOOMFIELD (1933). *Language* : 170

る。たとえば (21) における *j'ai faim* は、(19) の *j'ai faim* と同一の実現形を備えている。(22) や (23) における *je t'aime* は、(20) の *je t'aime* と同一の実現形を備えている。

文と同等の実現形を備えながら、他の発話の一部分となっている表意単位の実現形は、発話の他の部分に従属する。それが、他の発話の一部分だからである。たとえば (21) において *que j'ai faim* は、*crois* に従属している。実際 (21) から *que j'ai faim* を除去しても、*je crois* にみられる関係性に本質的な影響は生じない。一方 (21) から *crois* を除去すれば、*je* と *que j'ai faim* の間の関係に本質的な影響が生じる。よって (21) の *que j'ai faim* は、*crois* に従属していることになる (1.2.を参照)。したがって *que j'ai faim* の一部分としての *j'ai faim* も、*crois* に従属していると言ってよい。同様に (22) の *je t'aime* は、*crois* に従属している。また (23) の *je t'aime* は、*dire* に従属する。

文と同等の実現形を備えながら、従属接続詞記号素の実現形の利用によって他の発話の一部分となっている表意単位の実現形全体は、文ではなく、従属節と呼ばれる。従属節は、文ではない。より大きな発話の一部分だからである (2.1.を参照)。たとえば (21) の *j'ai faim* は文ではなく、従属節である。(21) の *j'ai faim* は、従属接続詞記号素の実現形である *que* の存在を介して、他の発話の一部分となっている。同様に (22) において従属接続詞記号素の実現形である *que* をともなった *je t'aime* も、文ではなく、従属節と呼ばれる。(21) の *j'ai faim* や (22) の *je t'aime* の出現は、*crois* や *que* のような他の表意単位の実現形の存在を前提としている。

3. 動詞文と非動詞文

3.1. 動詞文

他の表意単位の実現形から独立した表意単位の実現形全体は、文として認めることができる。たとえば (24) の *écoute* は、文であると言ってよい。また (25) の *cette règle semble évidente* もまた、文であると言ってよい (2.1.を参照)。これらは、他の表意単位の実現形に従属していないからである (1.2.を参照)。

(24) *Écoute !* (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.157)

(25) *Cette règle semble évidente.* (Bernard Werber, *Les fourmis*, Collection Le Livre de Poche, 1991, p.53)

動詞記号素は、独立的な表意単位である。動詞記号素は、その実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる表意単位である (4.1.を参照)。実際 (24) の *écoute* には、少なくとも音声的に、[ekut] という動詞形の語幹 (つまり動詞記号素の実現形) しかない。この [ekut] の出現は、他の実現形の存在に依存しない。

文としての独立性の基盤を、動詞記号素の実現形が担うことがある。動詞記号素は、その実現形が他の表意単位の実現形に従属する必要がない表意単位だからである。動詞記

号素の実現形が独立的であることによって、動詞記号素を中心にまとめた表意単位の実現形全体が、独立的であることが可能となる。

文としての独立性の基盤を動詞記号素の実現形が担う文を、動詞文と呼ぶ。たとえば (24) の *écoute* や (25) の *cette règle semble évidente* は、動詞文である。これらの文が他の表意単位の実現形から独立しているのは、その全体が動詞記号素の実現形を中心にまとまっているからだと考えてよい。

3.2. 非動詞文

他の表意単位の実現形に従属する必要のない表意単位の実現形全体は、文として認めることができる。たとえば (26) の *zut* や (27) の *pas de fardeaux inutiles* は、文であると言ってよい。同じく (28) の *identiquement le cuisinier* もまた、文として認めてよい。これらは、他の表意単位の実現形から独立しているからである (2.1.を参照)。

(26) Il n'y a plus de dentifrice. *Zut !* (Nicole de Buron, *Vas-y maman*, Collection J'ai lu, 1978, p.61)

(27) Il disait : *Pas de fardeaux inutiles*. (Henry Bauchau, *Antigone*, Collection J'ai lu, 1997, p.56)

(28) Le maître d'hôtel s'adressait à la jeune femme avec une excessive courtoisie en l'appelant « Princesse ». Le sommelier faisait de même. *Identiquement le cuisinier*. (Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.147)

文としての独立性の基盤を動詞記号素の実現形が担わない文を、非動詞文と呼ぶ。たとえば (26) の *zut*、(27) の *pas de fardeaux inutiles* そして (28) の *identiquement le cuisinier* は、非動詞文と呼ぶことができる。これらの文が他の表意単位の実現形から独立しているのは、そこに動詞記号素の実現形が含まれるからではない (3.1.を参照)。

(29) — Je te plais ? — *Oui...* (Arnaud Desplechin, *Commet je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.61)

(30) Tu vois, l'argent peut tout... *Triste !* (Nicole de Buron, *Chéri, tu m'écoutes ?... alors répète ce que je viens de dire...*, Collection Pocket, 1998, p.128)

(31) Merci, bonne nuit. (Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.102)

(32) *Patience*. On a toute la nuit. (Jean-Christophe Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.245)

(33) Ta gueule ! (Fred Vargas, *Un peu plus loin sur la droite*, Collection J'ai lu, 1996, p.26)

(34) Voilà une idée ! (Tonino Benacquista, *Malavita*, Collection Folio, 2004, p.229)

- (35) Autant aller se boire une petite bière bien fraîche. (Brigitte Aubert, *Descentes d'organes*, Collection Points, 2001, p.57)
- (36) Inutile d'attendre. (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.57)
- (37) Votre nom, s'il vous plaît. (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.163)
- (38) Et de sauter de joie en apercevant sa nounou. (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.110)
- (39) — Qu'est-ce que vous avez ? — *Une idée qui vient de passer*. (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.103)
- (40) Tu réinvestis les labos ? *Finie la lecture au salon ?* (Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.281)

非動詞文には、多様性がある。たとえば (29) から (40) は、いずれも非動詞文と考えてよい。文としての独立性を成立させる基盤が、動詞記号素の実現形ではないからである。これらの非動詞文の独立性の基盤は、一様ではない。

4. 独立記号素

4.1. 動詞記号素

動詞形には、動詞記号素の実現形が含まれる。動詞記号素の実現形を含むことが、動詞形であることの必要条件である。たとえば (41) の *pleure*、(42) の *a pleuré*、(43) の *pleurait*、(44) の *pleurer*、(45) の *en pleurant* そして (46) の *pleure* には、同一の動詞記号素の実現形が含まれる。この実現形は [plœr] という音声的な形を備えている。

- (41) [...], tout le monde *pleure*. (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.254)
- (42) Quand je suis parti, elle *a pleuré* quand même. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.35)
- (43) [...], mais il *pleurait* de joie. (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.121)
- (44) Au lieu de *pleurer*, elle éclata de rire. (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.337)
- (45) Elle souriait *en pleurant*. (Anna Gavalda, *Je l'aimais*, Collection J'ai lu, 2002, p.85)
- (46) Vas-y : crie, *pleure*, j'aime ça... (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.292)

動詞記号素は、その実現形が他の表意単位の実現形に従属する必要なしに、現れることができる表意単位である。実際 (46) の *pleure* にみられるように、多くの場合、動詞記号素の実現形は単独で現れることも可能である (3.1.を参照)。この *pleure* には、音声的に [plœr] という動詞記号素の実現形 (動詞形の語幹) しか含まれていない。なお主辞や目的辞は、動詞記号素の実現形に従属する要素だと考えてよい。主辞や目的辞は、動詞記号素の実現形がなければ現れえない要素だからである (1.2.を参照)。主辞や目的辞は、動詞記号素が要請する要素なのである。たとえば *tout le monde pleure* から動詞記号素の実現形である [plœr] を除去すれば、*tout le monde* は主辞としてのステイタスを失うことになる。他方 *tout le monde pleure* から *tout le monde* を除去したとしても、[plœr] が動詞記号素の実現形としてのステイタス (述辞) を失うわけではない。

したがって、動詞記号素は独立記号素のひとつであると言ってよい。実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる記号素を、独立記号素と呼ぶ。ただし、動詞記号素の実現形が常に独立的であるとはかぎらない。従属接続詞記号素、関係代名詞記号素、不定詞記号素、現在分詞記号素、過去分詞記号素、ジェロンディフ記号素などの実現形を用いることで、動詞記号素の実現形に従属的な実現形として使用することも可能である (5.1.を参照)。

動詞記号素は、文の成立基盤となりうる表意単位である。少なくとも動詞記号素の実現形が他の表意単位の実現形に従属しなければ、それを含む表意単位の実現形全体が、文としての独立性を獲得できることになる。独立記号素である動詞記号素は、動詞文の成立基盤であると言ってよい (3.1.を参照)。

4.2. 命題的記号素 (*oui*, *si*, *non*)

何らかの命題の代用として用いることのできる記号素がある。このような記号素を、命題的記号素と呼ぶ⁶。ここでの「命題」という用語は、大略、話し手や聞き手にとって真偽の判定対象となりうるような意味内容を指す。命題的記号素の実現形は基本的に、*oui*, *si* そして *non* である。たとえば (47) の *oui* は *il fait beau* の代用として、(48) の *oui* は *Ivan est déjà là* の代用として使われている。(49) の *si* は *ma mère est morte* の代わりとして、(50) の *si* は *tu est jolie* の代わりとして使用されている。また (51) の *non* は *je ne la connais pas* の代用として、(52) の *non* は *je n'ai pas fini* の代用として用いられている。なお命題的記号素の実現形は、(53) の *ouais* のような形に含まれて現れることもある。

(47) *Il fait beau, hein ? — Oui.* (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.43)

(48) *Ivan est déjà là ? — Oui et ta sœur aussi.* (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.51)

(49) *Ta mère est pas morte ?! — Si si.* (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.80)

⁶ MARTINET (1979). *La grammaire fonctionnelle du français* : 147

- (50) Ah. Je ne suis pas jolie ? — *Si*, tu es jolie mais tu es hostile. (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.123)
- (51) Tu la connais, hein.... — *Non*, je ne la connais pas. (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.28)
- (52) Tu n'as pas fini ?! — *Non*. (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.40)
- (53) C'est ta nouvelle copine ? — *Ouais* ; je ne l'aime pas. (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.25)

命題的記号素は、その実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる。実際 (47) の *oui*、(50) の *si*、(52) の *non* などにみられるように、命題的記号素の実現形は単独で、文として現れることができる (2.1.および 3.2.を参照)。命題的記号素の実現形は、他の表意単位の実現形から独立して現れることが可能である。

- (54) Je plisse les yeux, sans dire ni *oui* ni *non*. (Brigitte Aubert, *Transfixions*, Collection Points, 1998, p.130)
- (55) Faut-il, *oui* ou *non*, demander si c'est une fille ou un garçon ? (Anna Gavalda, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, Collection J'ai lu, 1999, p.25)
- (56) Votre bouche dit *non* mais vos yeux disent *oui*. (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.127)

したがって、命題的記号素は独立記号素のひとつであると言ってよい。実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる記号素を、独立記号素と呼ぶ。ただし (54)、(55) や (56) にみられるように、命題的記号素の実現形が常に独立的であるとはかぎらない (5.2.を参照)。

命題的記号素は、非動詞文の成立基盤となりうる表意単位である。少なくとも命題的記号素の実現形が他の表意単位の実現形に従属しなければ、それを含む表意単位の実現形全体に、文としての独立性を獲得する可能性が生じる。独立記号素である命題的記号素の使用は、非動詞文の成立基盤のひとつであると言ってよい (3.2.を参照)。

4.3. 間投詞記号素

間投詞記号素という表意単位は、その実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる。たとえば (57) の *pardon*、(58) の *chut*、(59) の *aïe*、(60) の *dodo* や *do*、(61) の *merde* などにみられるように、間投詞記号素の実現形は単独で、文として現れることができる (2.1.および 3.2.を参照)。間投詞記号素の実現形は、他の表意単位の実現形から独立して (つまり従属する必要なしに) 現れることが可能である。

- (57) Pardon. (Andrea H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.291)

(58) Chut ! Chut ! (Sébastien Japrisot, *La dame dans l'auto avec des lunettes et un fusil*, Collection Folio, 1966, p.92)

(59) Aïe ! Faubourg Saint-Honoré, c'est cher ! (Nicole de Buron, *Chéri, tu m'écoutes ?... alors répète ce que je viens de dire...*, Collection Pocket, 1998, p.142)

(60) « Dodo, l'enfant do ». (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.248)

(61) Merde ! Remerde ! Et merde encore ! (Nicole de Buron, *Vas-y maman*, Collection J'ai lu, 1978, p.46)

(62) Ne me dis pas *merci*, je fais ça pour moi. (Serge Brussolo, *La fenêtre jaune*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.98)

(63) J'ai horreur des *au revoir* dans les aéroports. (Amélie Nothomb, *Ni d'Ève ni d'Adam*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.172)

したがって、間投詞記号素は独立記号素のひとつであると言ってよい。実現形の出現が、他の表意単位の実現形に従属することを必要としない記号素を、独立記号素と呼ぶ。ただし (62) における *merci* や (63) における *au revoir* にみられるように、間投詞記号素の実現形が常に独立的な位置に現れるとはかぎらない。

間投詞記号素は、非動詞文の成立基盤となりうる表意単位である。少なくとも間投詞記号素の実現形が他の表意単位の実現形に従属しなければ、それを含む表意単位の実現形全体に、文としての独立性を獲得する可能性が生じる。独立記号素である間投詞記号素を用いることは、非動詞文の成立基盤のひとつであると言ってよい (3.2.を参照)。

5. 独立記号素の従属節化

5.1. 動詞記号素の従属節化

動詞記号素は、独立記号素のひとつである。実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる記号素を、独立記号素と呼ぶ。動詞記号素の実現形は、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる (4.1.を参照)。

動詞文は、基本的に、従属節化することのできる表意単位の実現形である。文としての独立性の基盤を動詞記号素の実現形が担う文を、動詞文と呼ぶ (3.1.を参照)。動詞文は、従属節として現れる可能性がある。動詞文は、たとえば (64) の *qu'elle grandit trop vite* や (65) の *lorsqu'on aime* にみられるように、従属接続詞記号素の実現形を用いて従属節化することができる。つまり (64) の *elle grandit trop vite* には従属接続詞記号素の実現形である *qu'*があり、また (65) の *on aime* には従属接続詞記号素の実現形である *lorsqu'*がある。これらの動詞文は、従属節化が可能であると言ってよい。

(64) Je trouve *qu'elle grandit trop vite*. (Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.187)

(65) *Lorsqu'on aime, on devient vulnérable.* (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.227)

したがって、動詞記号素は従属節化することが可能な表意単位であると言ってよい。動詞文は、基本的に、従属節化が可能な表意単位の実現形だからである。つまり動詞文の一部である動詞記号素の実現形も、従属節化可能であると考えてよい。従属接続詞記号素の実現形を用いた従属節化が可能であるという性質は、命題的記号素との共通点である一方で、間投詞記号素との相違点でもある (5.2.と 5.3.を参照)。

5.2. 命題的記号素の従属節化

命題的記号素は、独立記号素のひとつである。命題的記号素という用語は、何らかの命題の代用として用いることのできる記号素を意味する。命題的記号素の実現形は、基本的に、oui、si あるいは non である。また実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる記号素を、独立記号素と呼ぶ。命題的記号素の実現形は、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる (4.2.を参照)。

命題的記号素は、従属節化が可能な表意単位である。たとえば (66) から (74) にみられるように、oui、si、non という実現形は、従属節中に現れることができる表意単位の実現形である。これらの実現形は、que などの従属接続詞記号素の実現形をともなっている。従属接続詞記号素の実現形を用いた従属節化が可能であるという性質は、動詞記号素との共通点である一方で、間投詞記号素との相違点でもある (5.1.と 5.3.を参照)。

(66) Il m'interroge des yeux pour voir si ça va et je fais signe *que oui*. (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.123)

(67) J'avoue *que oui*. (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.288)

(68) C'est possible *que oui*, c'est possible *que non*. (Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, p.81)

(69) — Tu as faim ! — Pas du tout ! — Je crois *que si* ! (Marc Levy, *Sept jours pour une éternité...*, Collection Pocket, 2002, p.282)

(70) — On ne peut pas faire faux bond à la Mort. — Il faut croire *que si*. (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.160)

(71) — Ce n'est pas vrai ! — Bien sûr *que si*. (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.71)

(72) Vous, vous allez penser qu'il drague tout ce qui bouge *alors que non*. (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu, 2004, p.106)

(73) Plus tard, je lui demande s'il mange de la viande et il répond *que non*, juste du poisson, [...]. (*Elle*, 2 mai 2005, p.92)

(74) Si mister météo dort *pendant que moi non*, je vais finir par avoir sérieusement

le bourdon. (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.52)

したがって、命題的記号素の実現形による非動詞文には、文としてだけではなく、従属節として現れる可能性もあると言ってよい。非動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を担うのが動詞記号素の実現形ではない文を意味する (3.2.を参照)。命題的記号素の実現形による非動詞文は、従属節として現れる可能性をもった非動詞文である。

5.3. 間投詞記号素の従属節化

間投詞記号素は、独立記号素のひとつである。実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れるうる記号素を、独立記号素と呼ぶ。間投詞記号素の実現形は、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる (4.3.を参照)。

間投詞記号素は、従属節化ができない表意単位である。たとえば (75) から (78) にみられる間投詞記号素の実現形を、従属節として用いることはできない⁷。従属接続詞記号素の実現形を用いた従属節化ができないという性質は、動詞記号素や間投詞記号素との相違点である (5.1.と 5.2.を参照)。

(75) *Bonjour... un paquet de Marlboro... s'il vous plaît...* (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.82)

(76) *Bravo.* (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.64)

(77) *Allô !* (Nicole de Buron, *Qui c'est, ce garçon ?*, Collection J'ai lu, 1985, p.11)

(78) *Relax, mon pote !* (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.85)

したがって、間投詞記号素の実現形による非動詞文には、従属節として現れる可能性が基本的にはないと言ってよい。非動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を担うのが動詞記号素の実現形ではない文を意味する (3.2.を参照)。間投詞記号素の実現形による非動詞文は、従属節として現れる可能性のない非動詞文である。

独立的 (非従属的) な性質と、従属接続詞記号素の実現形を用いた従属節化を拒む性質を併せもつことを、本稿では「間投詞的」という用語で表現する。間投詞的な実現形が、間投詞記号素の実現形であるとはかぎらない (6.1.を参照)。

6. 間投詞的な表意単位の実現形と非間投詞的な表意単位の実現形

6.1. 間投詞的な表意単位の実現形

⁷ この性質の存在は、間投詞記号素の使用が眼前の発話環境と強く結びついていることを示唆しているようにも思われる。

6.1.1. 間投詞的な動詞文

動詞文のなかには、従属節として現れることが難しいものがある。動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を動詞記号素の実現形が担う文を意味する(3.1.を参照)。たとえば(79)や(80)にみられるような冒頭に等位接続詞記号素の実現形をともなった動詞文は、従属節として現れることが難しい。また(81)にみられる *ben* のような情意的な表現を(とくに冒頭に)ともなった動詞文も、従属節としての使用は難しい。(82)の *ouvre les yeux* のような命令の動詞形による動詞文も、従属節としては使いにくい。ただし(83)のような、従属節が直接話法に近いような場合は別である。(84)にみられる *heureusement que ...* のような構文による動詞文も、従属節には現れないことが普通である。

(79) *Et j'aime Johnny. Mais Johnny ne m'aime pas.* (Brigitte Aubert, *Transfixions*, Collection Points, 1998, p.16)

(80) *Et puis, j'ai perdu la notion du temps...* (Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.467)

(81) *Ben, je ne veux pas l'embêter.* (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.31)

(82) *Ouvre les yeux, hé, con !* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.201)

(83) *Par ma phrase, j'ai signalé à tout l'équipe que attention les mirettes, ouvrez grand les oreilles, le miracle va avoir lieu ici même servi par moi !* (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.173)

(84) *Heureusement qu'elles sont là.* (Anna Gavalda, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*, Collection J'ai lu, 1999, p.39)

(85) *Heureusement, la station de métro n'était pas loin.* (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.17)

このような動詞文は、間投詞的な性格をもつと推論することができる。従属接続詞記号素の実現形をともなった従属節として用いることが、難しいからである。間投詞記号素は、その実現形を従属節として用いることができない表意単位である(5.3.を参照)。

したがって、従属節として現れることが難しい動詞文は、間投詞的な側面を備えた表意単位の実現形であると考えることができる。たとえば(79)の *mais Johnny ne m'aime pas* は、従属接続詞記号素の実現形を用いた従属節化が難しい。よって冒頭の *mais* を除去した残りの *Johnny ne m'aime pas* と比べて、より間投詞的な側面を備えた実現形であると考えられる。*Johnny ne m'aime pas* は、従属節化が可能だからである。同様に(84)の *heureusement qu'elles sont là* は、(85)の *heureusement* のような文副詞をともなった動詞文と比べて、より間投詞的な側面が強いと推論することができる(6.2.1.を参照)。

6.1.2. 間投詞的な非動詞文

非動詞文のなかには、従属節として現れることが難しいものがある。非動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を担うのが動詞記号素の実現形ではない文を意味する (3.2.を参照)。たとえば (86) や (87) のようなタイプの非動詞文は、従属節として現れることが難しい。また (88) や (89) のような冒頭に *mais* などをともなった命題的記号素の実現形も、従属節として現れることは難しい (5.2.を参照)。(90) の *ouais* のような情意的な意味を含意した実現形も、従属節には現れにくい。また (91) における *pas tout à fait* のような非動詞文も、従属節としての使用は難しい。ただし (92) のような、従属節が直接話法に近いような場合は別である。

(86) Très important, l'estomac. (Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, p.194)

(87) Je n'ai pas beaucoup dormi cette nuit. *Une idée qui tournait*. (Fred Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.64)

(88) *Mais oui*, je t'aime, [...]. (Antoine de Saint-Exupéry, *Le petit prince*, Collection Folio, 1946, p.36)

(89) Mais non ! (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.37)

(90) Ouais. (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.65)

(91) Maintenant je me suis un peu consolé. C'est-à-dire... *pas tout à fait*. (Antoine de Saint-Exupéry, *Le petit prince*, Collection Folio, 1946, p.91)

(92) Il a fait un mouvement de tête qui disait que presque, mais *pas tout à fait*. (Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.21)

このような非動詞文は、間投詞的な性格をもつと推論することができる。文として現れる性質を備え、かつ (従属接続詞記号素の実現形をともなった) 従属節としての使用が難しいからである。間投詞記号素は、その実現形を従属節として用いることができない独立記号素である (5.3.を参照)。

したがって、従属節として現れることが難しい非動詞文は、間投詞的な側面を備えた表意単位の実現形であると考えることができる。たとえば (89) の *mais non* は、従属節化が難しい。よって単なる *non* よりも、間投詞的であると考えられる。単独の *non* は、従属節化が可能だからである (5.2.を参照)。同様に (90) の *ouais* は、命題的記号素の実現形そのものである *oui* よりも、間投詞的な側面が強いと推論することができる。

6.2. 非間投詞的な表意単位の実現形

6.2.1. 非間投詞的な動詞文

動詞文が、従属接続詞記号素の実現形をともなった従属節として使用されることがある。動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を動詞記号素の実現形が担う文を意味する(3.1.を参照)。たとえば (93) の *j'ai mauvais goût* は、従属節である。(94) の *si je suis français* にみられるように、疑問の動詞文が従属節として使用されることもある。また (95) にみられるように、*malheureusement* のような文副詞をともなった動詞文にも、従属節として現れる可能性がある(6.1.1.を参照)。

(93) Oh, tu estimes que *j'ai mauvais goût*... (Eric-Emmanuel Schmitt, *La rêveuse d'Ostende*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.202)

(94) Elle me demande *si je suis français*. (Frédéric Beigbeder, *Windows on the World*, Collection Folio, 2003, p.281)

(95) Elle dit qu'*elle ferme malheureusement dans dix minutes*. (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.205)

従属節としての動詞文には、非間投詞的な側面があると考えられる。間投詞記号素は、その実現形を従属節として用いることができない表意単位だからである(5.3.を参照)。

したがって、従属節として現れた動詞文は、非間投詞的な側面を備えた表意単位の実現形であると考えることができる。たとえば (93) の *j'ai mauvais goût* のような動詞文は、従属節であるため、非間投詞的な連辞の実現形であると推定することができる。

6.2.2. 非間投詞的な非動詞文

非動詞文が、従属接続詞記号素の実現形をともなった従属節として使用されることがある。非動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を担うのが動詞記号素の実現形ではない文を意味する(3.2.を参照)。たとえば (96) から (101) においては、非動詞文が、従属接続詞記号素の実現形を用いた従属節の位置に現れている。

(96) Il paye un séjour aux Seychelles à sa sœur qui n'a jamais eu de voyage de nocés, parce que *pas de nocés*, parce que *pas de prétendant*. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.102)

(97) C'était un brave garçon, bien que *totalelement immature*. (Agnès Abécassis, *Les tribulations d'une jeune divorcée*, Collection Pocket, 2004, p.166)

(98) Dans la chambre, j'ai été encore plus heureuse que la veille et je crois que *lui aussi*. (Sébastien Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.140)

(99) Il est vrai que *Vincent non plus*. (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.267)

(100) Je crois que *les voici*... (Georges Simenon, *Les sept minutes*, Collection Folio, 1965, p.203)

(101) Le moins que l'on puisse dire, c'est que *nous voilà beaucoup plus avancés*.

(Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, p.116)

従属節としての非動詞文には、非間投詞的な側面があると考えられる。間投詞記号素は、その実現形を従属節として用いることができない記号素だからである (5.3.を参照)。

したがって、従属節として現れた非動詞文は、非間投詞的な側面を備えた表意単位の実現形であると考えることができる。たとえば (100) の *les voici* のような非動詞文は、従属節であるため、非間投詞的な連辞の実現形であると推論してよい。

7. おわりに

文には、動詞文と非動詞文がある。文という単位は、他の表意単位の実現形に従属しない表意単位の実現形全体として定義することができる。動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を動詞記号素の実現形が担う文を指す。非動詞文という用語は、文としての独立性の基盤を担うのが動詞記号素の実現形ではない文を意味する。

動詞記号素、命題的記号素、間投詞記号素はいずれも、独立記号素である。独立記号素という用語は、実現形が、他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる記号素を意味する。命題的記号素は、何らかの命題の代用として用いることのできる記号素である。命題的記号素の実現形は基本的に、*oui*、*si* そして *non* である。

間投詞記号素は、その実現形を (従属接続詞記号素の実現形をとまなう) 従属節として用いることができない独立記号素である。従属節化できないという性質は、動詞記号素や命題的記号素との相違点である。動詞記号素や命題的記号素の実現形には、従属節としての可能性がある。

(102) *Mais je suis habitué.* (Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, p.182)

(103) *Mais non.* (Antoine de Saint-Exupéry, *Le petit prince*, Collection Folio, 1946, p.47)

(104) *On va voir ? — Non.* (Antoine de Saint-Exupéry, *Le petit prince*, Collection Folio, 1946, p.55)

(105) *Bertrand a l'intuition que non.* (D. Bretin et al., *Sable Noir*, Collection J'ai lu, 2006, p.125)

したがって、従属節として現れることが難しい動詞文は、間投詞的な側面を備えた表意単位の実現形であると考えることができる。たとえば (102) の *mais je suis habitué* は、従属節としての使用が難しい。この *mais je suis habitué* は、冒頭の *mais* を除去した (従属節として使用可能な) *je suis habitué* よりも、間投詞的な側面が強いと言ってよい。

従属節として現れることが難しい非動詞文は、間投詞的な側面を備えた表意単位の実現形であると推論できる。たとえば (103) の *mais non* は、従属節としての使用が難しい。この *mais non* は、(104) の *non* と比べて、間投詞的な側面がより強いと考えられる。(105) に

みられるように、non は、従属接続詞記号素の実現形をとまなう従属節として使用することができるからである。つまり (103) の *mais non* における *mais* は、命題的記号素の実現形である non を、いわば間投詞化していると言ってよい⁸。

(106) C'est pourquoi *mon histoire est si belle*. (Amélie Nothomb, *Péplum*, Collection Le Livre de Poche, 1996, p.138)

(107) C'est pourquoi *me voici orphelin et abandonné, confié à tes soins*, [...]. (Jacques Roubaud, *La belle Hortense*, Collection Points, 1990, p.28)

(108) [...], Oscar Wilde affirme que « la Nature imite l'Art ». Il n'est pas impossible que *l'Histoire aussi*. (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.208)

(109) Les autres, stupides, ne savent que faire. Faut dire que *moi non plus*. (Patrice Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*, Collection Le Livre de Poche, 2009, pp.103-104)

他方、従属節として実際に現れた動詞文には、非間投詞的な側面があると考えられる。たとえば (106) における *mon histoire est si belle* は、非間投詞的であると言ってよい。この *mon histoire est si belle* には（従属節化を拒むという）間投詞的な側面がみられないからである。

従属節として実際に現れた非動詞文もまた、非間投詞的な側面を備えた表意単位の実現形であると考えることができる。たとえば (107) の *me voici orphelin et abandonné, ...*、(108) の *l'Histoire aussi*、(109) の *moi non plus* は、非間投詞的な連辞の実現形であると推定してよい。これらが従属節だからである。これらの従属節は、間投詞記号素の実現形よりも、動詞記号素あるいは命題的記号素の実現形に近いと思われる。

参考文献

BLOOMFIELD, L. (1933). *Language*, New York: Holt.

MEILLET, A. (1903). *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris: Hachette et Cie.

MARTINET, A. (1979). *La grammaire fonctionnelle du français*, Paris: Cédif.

川島浩一郎. 1999年.「等位接続詞*mais*と非動詞文*oui, si, non*について」.『言語・地域文化研究』5: 43-55.

敦賀陽一郎. 1998 年.「等位接続と統辞機能」『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』三修社: 204-215.

⁸ 川島浩一郎 (1999)「等位接続詞 *mais* と非動詞文 *oui, si, non* について」: 43-55.